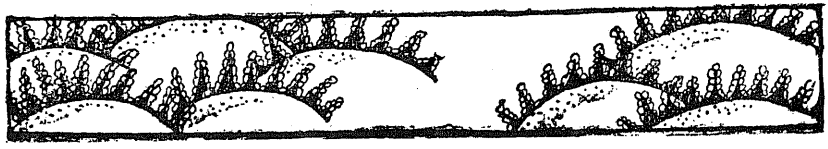


「兼ちやん。」

東京女子高等師範學校教授　岡田みつ

（七）寫眞

土曜日の午後、田村の家族が揃つて立花町を練つて行く樣子は、さも用ありげだつた。お芳と千代ちやんとは、めかしこんで居たがそれを委しく述べたてると長くなるから、それは省くとして、兼ちやんも晴着を着て新調の帽子を被つて居た。吉藏は、高帽をすこし横つちよに被つて緊い高いカラを着けてゐる。その兩端が首を動かすたびに咽喉を突くので弱つて居た。

「もうぢき、お父ちやん？」と兼公は、父の面を見上げて訊ねた。

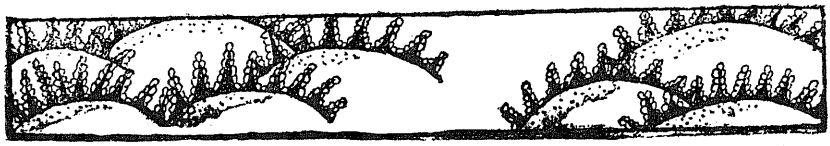
父親は「痛い」といふ聲を呑みこんで「そうだよ。」と答へた。

「何故、ひとは寫眞を取るの。」と兼公が尋ねると、

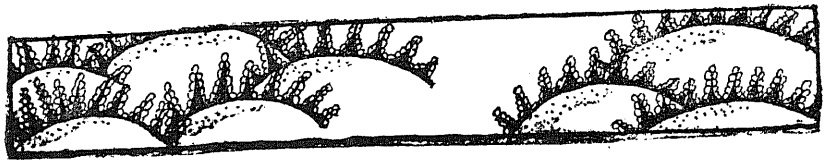
「全くだなア、兼坊。母ちやんが原田の祖父さんに上げたいツて言ふンだ。」

「あたい、寫したくないナ。」

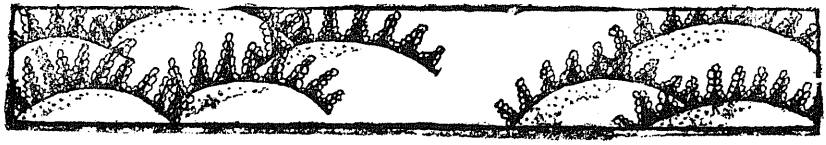
「いやか。お父ちやんもほんとに厭なんだが、母ちやんが寫したがるんでな。」



「お前さん、何を兼坊に言つてンです。」とお芳が言つた。
「あのナ、」と吉藏は妻の方を向いて、カラが食ひ入るのでたじろぎながら、
「兼公と二人で、寫眞屋は怖いといつてるところよ。」
「あ、そう。」と上機嫌にお芳は微笑して、「ぢやネ。母ちやんと千代ちやんとで怖くしないように寫眞屋ちやんに頼まうね。千代ちやん。……あら、お前さん、どうしたの？　大變な顏をするぢやないか。」
「このカラがいけないんだ。お前が、何でもしろッていふから。」
「見たかたちは良いよ。すこし緊いのかい。」
「全くよ。首がちぎれさうだ。」
「ま、いゝぢやないか。眞寫にはよく出來るよ。さあ大變だ！　兼坊はどこへ行つたらう。」
夫婦は心配さうに後戻りすると、兼公は往來に立つてお菓子賣りの屋臺を羨ましさうに眺めて居た。
「兼ちやん、お父ちやんに手を曳かれてね、もう勝手に、はぐれちやいけないよ。お夕飯にお菓子が貰へないよ。」とお芳は子供が容易く見付かつたのを悅んだ。



「お前さん、後生だから、この子を放さないようにしてゐておくれ。」
「さ、おいで、兼坊。」と吉藏は手を出して「もう寫眞屋へ來たぜ」
やがて一行は寫眞屋の狹い長い階段を登りかけた。
「千代坊をおれにおよこし。」と吉藏がいふと、
「あい、お前さんの方がいゝ。私や、ま赤な面をして、息をはづませてるところを寫眞にとられたくないからね。」と言ひながら、千代坊を渡した。受取つた方の吉藏は一層カラに惱まされることになつてしまつた。
階段をせつせと昇りながら、兼ちやんが、
「母ちやん、あたい、この帽子を被つたなりで寫すの。」と訊いた。
「寫眞屋が何ていふかきいて見よう。」と母親は答へた。
「脱れつていふといやだナ。」
「まあ、いゝ、訊いてみやう。」
「母ちやんも帽子を脱るんだらう。」
「そんな事があるもんか。」
「何故……」



默つて〳〵。」とお芳は、なるたけ口數をきくまいとするらしく制した。

やつと一同建物の最上層にある寫眞屋の室に到着し、扣室の座に就いた。お芳は千代ちやんを膝に載せて、何か子供に話しながら衣服を直したりしてやつてゐた。

兼ちやんは、壁に懸けてある數多の寫眞を熟と看ながら、

「お父ちやん、何故寫眞を取るときに、みんな變な顏するの。」

「ありのまゝの顏なンだよ。」と父親は嗤ひながら咽喉に手を當てゝ答へた。

「あたいも寫眞とるとき可笑しな顏していゝ？」

「母ちやんがいけないと言ふよ。」

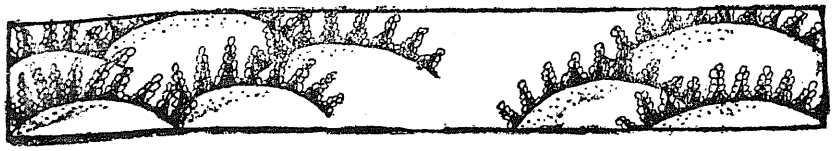
「何故？。」

「何故つて、唯……唯いけないンだよ。ごらん母ちやんが呼んでらア。」

お芳は兼坊に手招きして傍へ寄せ、

「靴下を引張り上げて、そんな、しかめ面をするんぢやないよ。……あれ、何だつて髪をそんなにもぢや〳〵にしたのさ。ちやんと撫でつけて上げるから、じつとしておいで。」

お芳は懷中から櫛を取出して、兼公の逆立つてる髪を直して「さ、そこに坐つてさあといふ時まで動かずにおいで。一寸お前さん！」



「何だ。」

「こゝへおいで。その上衣を引下して上げるから。まるで背駝みたように見える。」

「かまふもんか、背中を寫しやしめいし。」と言つてのけたものゝ、矢張お芳の傍へ來た。

「だつてどう寫るか分りやしないもの。」とお芳は賢こげに答へて「こゝにある寫眞をいろ〳〵見たんだが、中にはあんまり感心しないのがあるよ。」

「そんなのを千代坊に見せないがいゝぜ。びつくりすると困るからナ。そうだね、坊や、こら〳〵」と、彼は笑つて千代ちやんのあごの下を撫でたりした。

「お父ちやん、お父ちや……ん。」と千代ちやんが呼び立てた。

「上手だ！　〳〵。」吉藏はカラのボタンが外れてしまつたので、せいせいしてゐた。

「さこれでお前さん着物がきちんとしたよ。……だけど、ネクタイが……あれ、お前さんのネクタイは背中へまはつてるぢやないか！。」

「仕方がねいや。こんな厄介なカラをすれや、ネクタイがすつぽ抜けるのはあたりめいよ。」

「何故ネクタイ止めを使はないの。」

「おれや、あれが嫌ひないんだ！　かまはねいよ。おら獨りで直すから。」

「チョッ！　今、もすこしでちやんとなるとこだつたのに！　あ……あ、これで良し、そらね！。」

悦びの聲と同時にネクタイは元の位置に納まつたが、こんだはカラがポンと開いてしまつた。

「ほんとにお前さんどうしたの。」とお芳も、すこし自烈つたくなつて「なんだつてボタンを外したの。」

「ボタンが破れたんだ。」

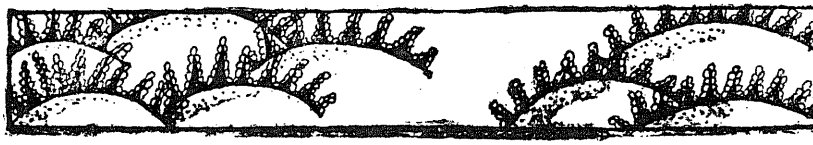
「破れた！　それで、お前さん寫眞を取る氣なの。」

「あ、これで可いンだよ。上衣のボタンを掛けておけば、カラがそれで留つてるだらう。そら、上等だ！」

「だつて、お前さん。」とお芳が言ひ出さうとすると、皆さん、どうかこちらへと案内する聲がした。

「いゝかい、キャビネ板でいふンだよ。」とお芳は、兼坊と千代ちやんとを、も一度檢査してから小聲で注意した。

吉藏は寫眞屋にその通りの注文をした。やがて一族が位置についた……お芳は千代ちや



んを膝に抱き、兼公は足の端を開いて母親の傍に立ち、吉藏は後ろに居て、親しげに片手を妻の肩に休めてゐた。寫眞師は黑布の中へ首を埋めた。

「あれ何してゐるの。」と兼公はかすれ聲で囁いた。

「默つて！」とお芳が囁いた。

「瞰いてゐるンだぜ。」と吉藏がそつといふ。

「何故瞰いてゐるの、エ、お父ちやん。」

「みんな行儀がいゝかどうだ。か見てるンだ。」と吉藏はふざけながら答へて「そうだなあお芳」と訊いた。

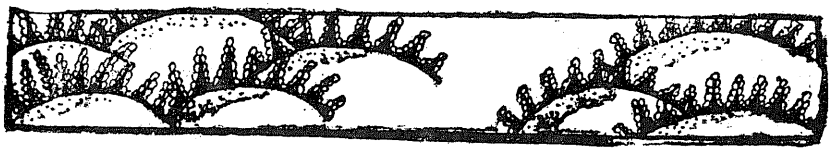
「靜かにおしッてば！」とお芳から手きびしい返事が來た。彼女は取りすまして硬くなつてゐた。千代ちやんはもぢ〳〵不安の態を見せ初めたら、やつと寫眞師が顏を出した。そして、坊ちやんは帽子を脫ぎ、旦那は上衣のボタンをお外しなさるようにと言つた。

「こいつは參つたな。」と吉藏は澁面を作つて笑つた。

「兼ちやん、帽子をお脫り。」とお芳は、せつなさうにいつた……後部の事件を考へて。

「あたい、帽子をとらないンだよ、母ちやん。」と兼公が言ふ。

「言はれる通りにするものだよ。手に持つてればいゝ。」



「さうです。坊ちやん帽子を手にお持ちなさい。」と寫眞師は愛想よく言つた。

兼公は、不平さうな顔をして言ふ通りにした。

「どうかボタンをみんなお外し下さい。……のこらずとうぞ。」と寫眞師は丁寧に吉藏にいつて、寫眞機の方に向つた。

吉藏はくす〳〵笑ひながらボタンを一つだけ殘してあとを皆外した。お芳の首はだんだん垂れて來た。……恥かしい思ひをするんだなと思つて。

「母ちやん。」とだしぬけに兼公が言ひ出した。「あたい、髪をもぢや〳〵にしちやつたよ。また帽子を被らうか。」

お芳は、急に頭を上げて懷中から何だか取出して、

「お前さん、あつちの室へいつてもしか私臺の上に櫛を置き忘れて來やしなかつたか見てきて下さい。」それから聲を落として「それから……あの……あ……こゝにピンが二本あるから。」こんどは寫眞師に向つて「すみませんが、一寸どうか待つて下さい。この子は、ほんとに世話をやかせて。」

とやさしく附け足した。

寫眞師は機嫌よく微笑した。すると、お芳はあら櫛はやつぱり懷中にあつたと言つて忙

の頭の髪を梳いてやつて、

「あの、差支がなければ、この子は帽子を被つたまゝで取りたいンですが。」といふと

「えい、それでも結構です。」と寫眞師は同意して。「坊ちやんの表情はどうも被つて居たときの方がたしかに快活でしたな。」と答へた。

吉藏は、上衣をさッと開いて、にや〳〵しながら入つて來た。

「櫛はどこにも見えなかつたぜ。」

「え、やつぱりふどころにありましたよ。……さ、もう宜しうございます。」

とお芳が寫眞師に言つたので、寫眞師は早速仕事に取りかゝつた。

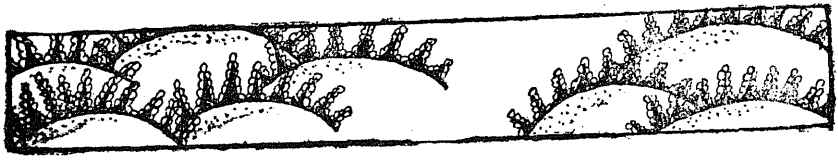
何の邊をどんな風に見てゐろと注意をし、みんなの顏から笑ひが消えるのを待つて彼は感光をさせると兼公が肝心のところで鼻を搔いて駄目にしてしまつた。

だつてしやうがないや。あたい、鼻がそれあ　くすぐつたかつたンだもの。」

「ぢや、この次は我慢しろよ。も一度寫すンだから。」「どうぞ、お動きにならずに。」と寫眞屋が注意する。

千代ちやんが母親の膝の上でヨタ〳〵搖くと、

「あれごらん、あれごらん。」とお芳は寫眞機を指して「いゝ、可愛いゝお窓だネ。」



「お父ちやん、あの函の中に何があるの。」と兼公がいふ。
「どうぞ、お願ひします。私が今一……二……さ……「もう取れたの。お父ちやん」」
「まだ、まだ、お前また駄目にするとこだつた。さ　じつとして。」
「お芳は　氣むづかしくりな出した千代ちやんをあやして、
「さあ、さあ、千代ちやんは、あの可愛いゝお窓で寫眞をとつてもらふンです。あれごらん！あれごらん！。」やつと小康があつた刹那を利用して、寫眞師は一枚とつた。また一ざわつきしてから、もう一枚とつて、こんどのは非常にうまくいつたやうだとお芳に話した。吉藏は、出來上つたのをすぐ持ち歸るつもりでゐたのをお芳が小聲で、そんな事は出來ない。キャビネは時がかゝるのだと敎へた。話をとりきめて、一同は店を出た。
母ちやん、あたいの帽子ね、寫眞にも紅い總がついてるのが出る？　紅くは寫らないよ。」
「どうして。」と兼公は如何にも、つまらなさうに見えた。お父ちやんに訊いてごらん」。
兼公が父に尋ねると、「いゝやな。紅く出なかつたら赤く彩つてくれと賴んでやろよ。きつとしてやる。お前はいゝ子だからな。そうだなお芳。」
「あ、このもぢや〳〵頭め！」と母親は笑つたり歎息したりした。

（七）了